

SY7-2

COVID-19のこれまでの疫学のまとめと現状

神谷 元

国立感染症研究所実地疫学研究センター

2019年12月、中華人民共和国湖北省武漢市において確認され、2020年1月30日、世界保健機関(WHO)により「国際的に懸念される公衆衛生上の緊急事態(PHEIC)」を宣言され、3月11日にはパンデミック(世界的な大流行)の状態にあると表明された新型コロナウイルス感染症(COVID-19)は、2022年2月27日時点で感染者数が世界で4億人を超え、死亡者数も600万人に近づいている。

COVID-19に対して治療薬やワクチンが開発され、国内の状況は流行当初と比べかなり変化した。特にオミクロン株流行後は、重症化する患者が減少する一方、急激な患者の増加で濃厚接触者も急増し、社会機能、施設運営の維持が難しくなるなど新たな課題に直面している。疫学的にも、成人中心だった感染者の年齢分布は次第に小児に広がり、保育園や課外活動の場面でのクラスターが多く認められるなど、流行初期との変化が認められている。

このように、COVID-19の流行は、世界的に、かつほぼすべての世代に対して様々な面で大きな影響を及ぼしている。また、COVID-19への対応も直接的、間接的に他の感染症にも影響を及ぼしている。しかし、渡航制限やSocial Distancingを含め、徹底した飛沫・接触感染対策の実施は一定の効果が出た半面、経済的、社会的なインパクトが大きく、半永久的に実施できるものではないことは多くの方が同意される事実であろう。COVID-19とどのように向き合っていくのか、今後我々に突き付けられた課題である。今回は2020年2月から発生したCOVID-19のパンデミックについて疫学的にまとめるとともに、現状の課題を特に小児を中心に検討する。